



鎌倉楽しむ会・第三十五回例会 《鎌倉コース》
「常楽寺」の資料

義高と大姫の恋



企画責任者
清藤 孝

大姫と義高の悲恋

ちてん
治天の君

奈良時代より継承されてきた藤原家による摂関政治は、平安時代の第七十代白河天皇（一〇七三・皇位継承）によって、天皇親政に移っていく。

さらには応徳三年（一〇八六）天皇の御位を堀河天皇に譲位し、自らは上皇に就任し、また、嘉承二年（一一〇七）第七十四代鳥羽天皇の時代に移っても白河上皇による院政はますます強めていく。

白河院と呼称され、また、「治天の君」とも称されるようになっていく。この時代から朝廷を守護する大番役は、専属の「北面の武士」となっていくのです。

後には、この北面の武士に平清盛、源義朝も名を連ねてきます。

白河院は、日宋貿易で富を蓄え献上する平忠盛を重用し、忠盛には、その授与品として祇園女御を与えたと伝わる。この時、祇園女御は清盛を身籠っていたのでは？という歴史上の話があります。

また、白河院は、鳥羽天皇へ妃として、待賢門院を勧める。そして、間もなく妃より誕生した後の第七十五代崇徳天皇については、夫の鳥羽天皇は、少なからず白河院と待賢門院の間に生まれたのではないか？との疑いが晴れず、白河院が大治四年（一一二九）に薨去すると、一気に寵臣を含めた騒乱の時代に突き進んでいく。

白河院の後には、鳥羽上皇が院政を敷き、崇徳天皇派と次第に対立するようになる。

源義朝と義賢よしかたの誕生

源義家を祖父にもつ、「源為義」は京にて、永長元年（一〇九六）誕生する。成人し、源

氏の棟梁として白河院から鳥羽天皇に伺候することになります。初期の為義は、院との関係が深く、即位したばかりの鳥羽天皇の警護をしていたという。同じ年の平忠盛と並んで、保安五年（一一二四）の比叡山延暦寺の強訴にも動員している。

為義の最初の妻は、白河院近臣の藤原忠清の娘で、長男の義朝（頼朝の父）を保安四年（一一二三）に生んでいる。

しかし、度重なる朝廷と摂関家との不祥事に巻き込まれ、鳥羽院（白河院の薨去後の呼称）の信任を失っていくが、藤原頼長に接近し、崇徳天皇に臣従していくことになる。

また、為義は子沢山に恵まれ、次男の義賢は、母が六条太夫重俊の娘（？）と伝わるが生年は不明です。しかし、長男の義朝とは幾年も違わないと思われる。

不
和

成人した義朝は、父の為義との関係が芳しくなく、都から曾祖父・頼義の故郷である東国へ（鎌倉）下向し、在地豪族を組織し勢力を伸ばしていく。その時、三浦豪族の娘との間に、長男の源義平を誕生させている。

その勢いに乗って再び都に戻って、久安三年（一一四七）には正室に熱田大神宮宮司藤原季範の娘・由良御前を娶り、その二人の間には嫡男（三男）の頼朝をもうけることになります。

義朝は妻の父で、院近臣の藤原季範の後ろ盾を得て、鳥羽院や関白の藤原忠道にも接近し、仁平三年（一一五三）には「下野守」を任じられるのです。

一方、弟の義賢は、保延五年（一一三九）には、後の第七十六代近衛天皇である東宮・体仁（なりひと）親王を警護する東宮帯刀先生（とうぐうたちはきのせんじょう）という重要な官職に補任されている。その後、左大臣・藤原

頼長の所有する能登国の預所職となり、年貢の徴収を行っている。

兄・義朝が下野守に就任し南関東に勢力を伸ばすと、義賢は、父・為義の命により義朝に対抗すべく都より北関東へ下った。上野国多胡（現在の高崎）を領し、武蔵国の最大勢力である秩父重隆と結んで、その娘を娶ります。

そして、武蔵国比企郡大蔵（現在の埼玉県比企郡嵐山町）に館を構え、長男・仲家、次男・駒王丸が誕生する。

しかし、義賢は、鎌倉の義朝・義平との間で領地の争いを繰り返していたが、久寿二年（一一五五）八月、鎌倉・義平に、住いの大蔵館を襲撃され、義賢は義父の秩父重隆と共に討ち滅ぼされてしまう。

その時、大蔵館に居た、駒王丸は、畠山重能、斎藤実盛らの計らいで信濃木曾谷（木曾村）に逃れ、中三権守（ちゅうざうごんのかみ）

の中原兼遠に預けられ、後の源義仲（木曾義仲）に成長していくのである。

木曾義仲

逃げ延びた二才の駒王丸は、木曾谷で育てられ、十三才で元服し「木曾次郎」と名乗り「木曾義仲」となっていく。

少年期の生い立ちについては歴史的な記録は伝承として、諏訪神社の下社・宮司である「金刺盛澄」に預けられ修業したとされている。

二十七才の時、治承四年（一一八〇）後白河法皇の二男・以仁王による平家追討の「令旨」が叔父の「源行家」から拝戴し、その年の九月七日には挙兵することを決意する。

信濃国の平家軍を破り、父の遺領でもある上野国に向かった。しかし、すでに鎌倉源氏

權威と足利源氏、甲斐武田の勢力が、ここにも及んでいたため引き上げることとした。

平家の追討を北陸の地に集中し連戦連勝を繰り返していく。

また、その時の義仲軍中には、頼朝が鎌倉幕府の立ち上げの時、頼朝に反旗を翻し、頼朝に戦いを挑み壊滅的に敗れ逃走し、姿をくらませた「義賢の弟・志田義弘」が大将として戦っていることがわかり、鎌倉の頼朝と一触即発の状態となった。

義仲は、この緊張状態を和解に持ち込むため、頼朝の要求を呑み、寿永二年（一一八三）三月、長男の「木曾冠者義高」を鎌倉へ人質として送った。

いずれは頼朝の長女・大姫（当時六才）の婿になるであろうという十一才の少年である。

鎌倉との和解が成立した義仲は、平家追討を加速させていく。歴史上の物語として有名

な平家軍との戦いに勝利し、この勢いで、比叡山をも味方につけて、一気に平家を西海に追いやっていく。そして、後白河法皇に認められ、平家の都落ちを深追いし、水島で平家軍の反撃に遭い、京に敗走してくる。

兵糧の不足もあり、洛中で乱暴狼藉が横行する。義仲は公家社会の権謀術策の無縁な直情を頭にし、後白河法皇、公家、町衆から嫌われてくる。

後白河法皇は秘かに、鎌倉の頼朝へ、「義仲懲罰」の院宣を発する。頼朝これにすばやく反応し、源範頼を大手から、源義経を搦手から出發させ、義仲の必死の抵抗もむなしく、近江の粟津ヶ原で義仲は討ちとられてしまう。寿永三年（一一八四）一月のことである。享年三十一才の波乱万丈の生涯であった

源頼朝

頼朝は父・義朝とはぐれ永暦元年二月九日（一一六〇）、平頼盛の郎党・平宗清に捕縛され、京・六波羅に連れていかれ、清盛から処刑されるところを、清盛の継母「池禅尼」の嘆願で助命された。そして、伊豆は蛭ヶ小島への配流となった。

そして、ここから平氏・平清盛の武士による政権が強められ、「平氏にあらざんば人にあらず」と豪語する平家一門の繁栄が、清盛が治承五年（一一八一）一月「頼朝の首を我が墓前に供えよ」と言って逝去するまでの約二十年間続くのである。

平治の乱（一一五九）に助命され、その翌年、十四才で伊豆の蛭ヶ小島に配流された源氏の嫡流・頼朝は、北条時政の監視下に置かれることとなる。しかし、行動は余り縛られることなく、父・義朝と先祖の供養読経、また、時政の長男・宗清、義時は「源氏の棟梁」として敬し、交流も盛んにしていたようです。

また、伊東国の豪族・伊東祐親の娘・八重姫と通じ子をもっている。このことに激怒した祐親に命を狙われ、伊豆山神社に駆け込み事なきを得たり、いろいろと自由な行動をしていたようです。

食料は、乳母の「比企局」の里（埼玉県東松山近辺）から、流人生活の二十年間送られてきたようです。情報は、京の下級貴族「三善康信」が月に三度、京の政情を送ってきていた。

さらには、京は神護寺再興のことで、後白河法皇に強訴し怒りを買ひ、そして、伊豆に流されてきた「文覚上人」との付き合いもあり、文覚上人からは平氏打倒を強く勧められたという。

また、物語では、北条時政は、娘の「政子」を、伊豆の目代・山木兼隆に嫁がせようとしたが、政子は頼朝と恋仲となり、伊豆山神社に、今度も駆け込み、頼朝との恋を実現した

という。治承二年（一一七八）には、長女の「大姫」が誕生した。

治承四年（一一八〇）以仁王の令旨が、頼朝のもとに届き、この令旨が諸国の源氏に行きわたっていることが、平清盛の怒りとなつて、各地の平氏による源氏狩りが始まつた。四国・土佐に流されていた弟の「希義」の殺害も頼朝に知らされ、いずれ頼朝も狙われることは明白になった。

八月一七日は豪雨となつたが、北条宗時ら三百騎をもつて、三島神社の夜祭に紛れ、まずは、目代の山木兼隆を誅殺し「石橋山」で平氏討伐の旗揚げをした。

この時にも政子と大姫は伊豆山神社に匿われた。そして、父の時政と義時は甲斐源氏に援軍依頼に鎌倉を離れた。

頼朝は旗挙げ当初は敗れるが、十月には二万の大軍を率いて鎌倉へ凱旋すると、すぐに大倉御所の創設を図った。

また、平維盛率いる平家の大群も富士川の戦いで追いやってしまう。また、常陸国の志田義弘（義朝の弟）の、頼朝への反旗を翻したのも蹴散らしてしまう

武蔵国を平定し、甲斐源氏、足利源氏も鎌倉幕府創設には馳せ参じ、頼朝は少年期を京の公家社会で育ち、その政治力を見習ったのか、着々と鎌倉幕府の形を整備していく。

翌年、平清盛が逝去し、以仁王の遺児・北陸宮を拝戴し、京の都での振る舞いが、後白河法皇に嫌われた「義仲」への討伐の院宣が発せられ、義仲は誅されてしまう。

義高と大姫

このような状況下では、鎌倉にいる「木曾冠者義高の処遇が問題になってきた。過つて「父・義朝」を殺され、その恨みを忘れずにいた頼朝としては、同じ境遇にある義高を生

かしておくことは、少年といえども危ないと考えた。この心情は妻・政子と大姫にも伝わってきます。

将来は、大姫との二人の幸せの世界を考えていたであろう幼い義高も身の危険を感じてきたことでしょう。

義高は、頼朝の妻・政子と大姫の計らいで、元暦元年（一一八四）四月二日の夜明け前、義高を女装させ、大姫の女房たちが義高を囲んで屋敷から出しました。

馬蹄には真綿が巻かれ、蹄の音を聞かれないようにしたという。また、義高の寢床には、木曾からの付添人「海野幸氏」が臥し、日が昇ると双六をしている義高の身代わりをしていました。

しかし、夜になり義高の脱出は露見します。頼朝は怒り、すぐに堀親家以下の者に義高を見つけ出し討ち取るように命じます。

鎌倉を脱出し、過って祖父・源義賢の居た大蔵館（現在の埼玉県比企郡嵐山町）を目指したが、五日後の四月二六日、入間宿まで来た時、討手に追いつかれ、討ち果たされてしまう。

義高が討ち果たされた報を知らされた政子は、直接、義高に刀を掛けた藤内光澄を打ち首にしてしまう。

しかし、大姫の衝撃は深かった。飲み物さえも喉を通らないほど心の傷跡は、その後も癒されず、うつ状態が長く続いた。「義高恋し」の一念である。

心を慰める一環であろうか、父・頼朝は、文治二年（一一八六）、大姫に対し南御堂（勝長寿院）へ静御前を呼んで舞を見せたり、また、鶴岡八幡宮での舞を見ても、大姫の容体は一向に良くなり、その後一進一退を繰り返した。

頼朝は大姫の気分転換のために妹の子・一条孝能を婿の候補に勧めたが、大姫は強いて結婚させるなら、深淵に身を投げて死ぬという。これには頼朝も、ほとんど困り果ててしまった。

大姫が一五歳くらいの時、後鳥羽天皇の妃という玉の輿が持ち上がる。頼朝の考えは、大姫も納得してくれると思っていた。

そして、行く末は、皇子が誕生し天皇の位に就いたら、これによって、今よりはるかに大きな力を朝廷に及ぼすことができると思っていた。

しかし、大姫の鬱は、結局は快癒せず、頼朝の思惑が実ることもないまま、建久八年（一一九七）二十才の生涯を終えた。

それから二年後の建久十年（一一九九）一月、源頼朝も波瀾万丈の生涯を閉じるのである。